

かぐらおが

第 37 号

昭和58年 9月15日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 解剖学第一講座 佐藤洋一)

旭川見本林

内 容

医学雑誌——日本とアメリカ……………吉岡 一…… 2	第9回医大祭を振り返って……………大山 昌宏… 6
私の「旅」……………平塚 寿章… 3	地区体男子総合3位ノに輝く…………… 7
新任教官紹介…………… 4	第26回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)… 8
就任にあたって……………山村晃太郎… 4	トレーニング機器講習会…………… 8
山村教授を迎えて……………金沢 徹… 4	学生教育研究災害傷害保険の改善について………… 9
卒業生の動向…………… 5	研究室紹介……………田中 達也… 9
開学10周年を祝う…………… 6	課外活動短信…………… 10
第9回医大祭…………… 6	窓 外……………黒島 晨汎… 10



医学雑誌——日本とアメリカ

吉岡 一

数年前のことである。研究上のことでよく識った仲のアメリカ人S氏から、新しく学術誌を発行するから編集委員にならないか、という話である。勉強にもなることなのでそのまま引き受けることとした。それから何度か、原稿が必要だから送ってほしいとの催促である。日本国内から原稿を集めるのも編集委員の仕事だという。ちょうど手持ちの原稿を送り出した端境い期で適当なのがなく困った末、やや領域上問題はあったが手許にあったものを送った。まもなく返事が来て、この論文は掲載できないという。Reviewerが2人とも賛成しないといっている、といいそれぞれの意見をつけて送り返してきた。

編集委員からの原稿を、しかも頼まれた末に無理をして送っているのに、それをにべにもなく断るとはいかになんでも失礼な話である。そこでreviewerが不勉強である、などと反論を試みたが、“どこそこの何という雑誌に送りなおしてみようか”などというばかりで取り合う気配はない。要するに編集者を“知っている”とか“仲がよい”などということは論文の採否とは関係ないことなのである。あたり前のことがあたり前に行なわれているということを知った。

ちょうどその頃、国内の専門誌で全く逆の経験をした。ある新しい学会誌から論文のreviewをたのまれた。読んでみると研究の目的と方法に倫理上問題があるようだし結果の分析が甘いので不採択とすべきだとし意見を付して戻した。ところがである。折り返し編集者から、断るとの意見ならば第二の査読者に原稿をまわすという。そしてその人がOKしたとのことで編集者は結局その論分を採択した。はじめから掲載を断るという考えはなく、形式的に査読を求められたことを知って嫌な気持ちになった。編集者は次回からその研究所からの投稿が来なくなることを惧れたのであろう。このように及び腰で専門誌の編集をすると質の低い論文を掲載することになり、悪貨は良貨を駆逐するから雑誌の質を下げてしまう。

よく、日本の研究者は国内の文献をだいにせず、外国のものばかり有難がるが、これは故なき外国崇拜ではないかといわれたものである。しかし質の低い国内誌を相手にしている余裕はない、という第一線の研究者の言い分にも一部の理はある。相互批判のおだやかな日本の風土は科学の進歩には向かないのではないか。

相互批判の甘さについては富士見病院や筋硬縮症など例をあげるに事欠かないが、最近気になるのは医師の脱

税である。税務署の発表によれば、いつも10位以内に医師や開業医がひしめいている。これなど私たち“薄給”の医師としては口惜しい限りである。よく、このような脱税は“ごく一部の不心得者”という。それならば他に及ぼす迷惑が多であるから医師会や学会は、除名などの厳しい内部処置が必要であろう。でなければ、互にかばい合うものと世間に受け止められても仕方がないのではないか。乱獲密猟を許さないといわれた花岡執行部の勇断を期待したいものである。

医学雑誌で今ひとつ極端な彼我の対照をあげてみよう。それは日本医師会雑誌(日医誌)とアメリカ医師会雑誌(JAMA)のちがいである。日医誌は会員に読まれなくてお蔵入りになることが多いのではないかと。つまり内容に読みがたがあるのである。理事会の議事録はよいとして、編集者の指名した第一級の学者の研究がのっているが、読者にとってはわかりにくく、臨床の現場から遊離したものであることが多い。なんといってもこの雑誌の最大の特徴は会費を払った会員からの投稿を受けつけないことであって、本質的に上意下達の広報誌である。この構造ははたしなくも日本の医学研究の一つの断面を示すものであろう。研究者による第一線の仕事はたしかにとび抜けて優秀である。しかしこれが医療の現場と関係ないものであるとしたらどうなるのだろうか。私には日本の医学の全体水準が高いものとはとても思われないのである。一方、JAMAは面白く読みやすい。学術論文は研究者、臨床医の大多数にとって最も興味のあるものを扱い、質の高さも第一級である。医学教育も核軍縮についての会員からのアピールもある。読者からの手紙、載った論文にたいする反論批判も掲載されて賑やかである。読者の欲する記事を載せ参加を歓迎する雑誌づくりといえよう。

じつは、日医誌の編集陣がJAMAの日本語版の翻訳出版に協力し購読を会員にすすめていることをご存知のかたも多いだろう。こうなると創造は得意ではないが、知識の輸入には熱心、というわが国の学術研究の体質が浮きぼりになっていることに気付かずにはおられない。自前の雑誌の改善こそが先決と思うがいかがなものだろうか。

相互批判の厳しさとそれを受け入れる度量、そして学術研究への全員の参加、この2つがプロフェッショナルとしてのわが医界の学術水準向上のための条件なのではないか。病氣療養中、こんなことを考えていた。

(副学長・附属病院長)



私の「旅」

平塚 寿章

「旅」という語を手近にある国語辞典で引くと、「自分の家を離れて、よその土地へ行くこと」となっている。それならば、「最近流行のキャンピングカーに、ガスレンジ、テレビ、冷蔵庫などを積んで家族一緒によその土地へ行くことは、もはや旅とは言わず変則的ジブシー生活とでもいうのだろうか……」などと少しヘソ曲りなことを考えても、とにかく私は旅が好きである。人から「旅のどういう点が好きか」と聞かれても、即答できるような答えは持ち合わせていない。しかし旅の快感というのは、子供の時から抱いている時間と空間に対する一種の不可解さ、つまりこの一瞬にも自分と同じ人間が遠く離れた土地に生きていることの意外さを実感させてくれる点にある、といったら良いかもしれない。それに、昨日迄の自分の日常が、旅に出た日から一瞬にして追憶の中にしか存在しなくなるというのも妙な体験である。毎日の生活のために家族ぐるみで住む場所を移さざるを得ないヨーロッパのジブシーやカラハリ砂漠の狩猟民族は、おそらく一度もこんな感じをもたないだろう。こう考えると「旅に出る」などという行為そのものが、持てる人の贅沢な遊びという感じがしないでもない。

しかしながら、幸か不幸か最近の私の旅はどちらかという持たざる人の精一杯の遊びという感が強いのである。というのは、学会などで出張することを無理やり「旅に出るのだぞ」と自分に言い聞かせており、学生時代のように純粋に旅に出るということがなくなったからである。これは、金と時間がないからに他ならない。それでも出来る限り旅らしく体裁を整えることだけは忘れず、飛行機を使わず九州の果て迄も汽車で行ったりする。しかし、これも思い通りには行かないことの方が多い。汽車で行くとなると日程に余裕をもたせなければならず、出発当日まで無理をしてしまう。その結果は連絡船の中で発表準備に追われたり、昼間から寝台車に乗っているのと同じになってしまう。また珍らしく準備が終わってから汽車に乗っても、問題は隣席の乗客である。私は元来、タバコのパッケージに「他人の健康のために自分で吐いた煙は必ず自分で回収しましょう」と印刷してもらいたいくらいタバコの煙が嫌いである。タバコ飲みと乗り合わせたらそれこそ「死出の旅」となり、2日間位自分が王子サーモンになったような気がしてしまう。また、話し好きの中年女性と乗り合わせても大変である。どこから来てどこへ何をしに行くのかと、まるで警官の職務質問のようなことを聞かれ、あげくの果ては持参して

る紙袋の中から出てきた子供が食べるような袋菓子を無理にすすめられる。こんな時、私は途中の停車駅で降りるふりをして、別の車両に移ってしまう。しかしある時などは親切にも出口の所まで見送られ、なかなか別の車両に移れなかった。とにかく汽車に乗ること一つをとってみても、学会出張と旅を実感することを両立させることは大変なことである。

ところが、学会と汽車の旅を同時にやろうという企画が昨年実行されたのだ。残念ながらこれは日本の話ではなく、オーストラリアの話である。昨夏、オーストラリア西部のパースで国際学会があり、私もこの学会とその後のシドニーでのシンポジウムに出席した。この時、別なシンポジウムがシドニー・パース間を結ぶ大陸横断鉄道の中で行われたのである。この特急はシドニーを出発すると約66時間後にパースに着く。私はこの話を聞いた時、私の出席するシンポジウムのオルガナイザーがきわめて常識的な人であることを非常に残念に思った。でも、車中シンポジウムに参加した日本の某教授から帰りの飛行機の中で聞いた話によると、かなりひどいことになったらしい。まず、午後3時過ぎに出発する予定の列車が、オーストラリア名物のストのため結局翌日出発した。その上、列車内ではワインも飲み放題で、列車が名所にさしかかると演者が発表しているのもかまわず、座長が突然「皆窓の外を見ろ、あれが有名な○○だ！」と観光案内もやってくれたそうだ。私はこの話を聞いた時、はからずもわが日本国有鉄道のお座敷列車を連想してしまった。この車中シンポジウムの話などは、まさに学会のついでに旅情も味わおうということの難しさを良く物語ってくれる。日本に着くまでの間、某教授の口からついに一言も車中シンポジウムの発表内容について話さなかったことも、私には当然のように思われた。

とは言いつつも、私は今年もやはり色々計画を立て「学会出張の旅」に出るのだろう。しかしながら私の旅も、年ごとに形骸化してきているようだ。気にかかることが多くなり、昨日までの日常が旅に出たその日からすんなりと追憶の中へと入ってくれなくなったからかもしれない。「旅に出たいと思うのは、帰る所があるからだ」というのが本当だろうか。

(化学 助教授)

新任教官紹介

昭和58年5月1日付けで衛生学講座に山村教授が就任されました。山村教授はすでに教育研究に当たられ講座の充実を図られています。本誌では御本人から挨拶をいただくとともに、親しい教官から御紹介いただくこととしました。新任教官の教育研究方針を理解する一助とさせていただきます。

(学生課)

就任にあたって

■ 衛生学講座 ■ 山村晃太郎

私は医師としてのスタートを切った郷里函館を皮切りに大学、研究所、大学といくつかの所を経て、本年5月、この美しい大雪連峰を眺望できる本学に赴任しました。

季節が丁度この地方でもっとも良い初夏から夏を迎えているので、梅雨めいたものもなく、また乾いた気持ちの良い日射の中、職住近接のたとえのごとく、歩いて十分程の道のりを通っています。もっとも当地方の天候を評価するためには、日本有数の寒い冬の日を体験しなければ駄目といわれているので、これの評価は来年までおあずけ。

職住近接といえば、私が東京都立神経研に通っていた時は、自宅から自転車で10～15分で東武東上線武蔵嵐山駅、そこから電車に乗り、一度乗り換えて国鉄中央線西国分寺駅に着き、そこから歩いて15～20分で職場に到着、全コース片道2時間以上という点と比較すると、関東はなんと過密であるかと思知らされます。

この広い上川盆地は、また極めて静かな環境を人に提供していることは、先日車の交通量が当地方でもっとも多いと考えられる、国道39号線上で学生実習の際に騒音レベルを測定中、車の通過台数を調べたら、何と本州の大都市の国道のそれらの約 $\frac{1}{4}$ 程度であるので、道路騒音の低いのも当然なりと知らされました。

このような環境下で私は、穏やかで、ゆっくりとしかし確実な仕事を続けることが出来たらと希望します。

ただ私共の領域である社会医学は、基礎医学であるとはいっても、活発に動いている社会が、それ故に吐き出す、もろもろのヘドロの処理やそのようなヘドロを生み出す仕組みの改善ということにあるので、あまりに穏やかで、静かな環境というものは、多少私共の食欲を誘わないといったら、本州の過密地帯に住んでいる人間からみたら、ぜいたくといわれるでしょう。ともかく夜こんなに多くの星を仰いで帰宅できるのは幸福なかもしれません。さて第2代目の講座担当者として新しい大学、新しい土地で、教育と研究の灯を継続してゆく重い責任を痛感しておるこの頃です。

山村教授を迎えて

金沢 徹

最近本学に着任された山村教授は、北海道大学医学部でも学んだ同期生であります。ですから、ここでは敢て山村君と呼ばせて頂くことにします。山村君は、当時、地味でくちかずの少ないしかしどこかうちに秘めた闘志を感じさせる青年でした。30年近く過ぎた現在も、そのおかげは残っているように思えます。

山村君は医学部を卒業されたのち、いったん精神科医として勤務されたのですが、5年を経てあらたに社会医学を志され、北大の社会医学系大学院に入学されました。この大学院を修了されてからは、国鉄労働科学研究所や東京都神経科学総合研究所に勤務されました。この間、もちまへの闘志で猛烈に仕事をされ多数の研究業績をあげられて、昭和50年には日本交通医学会から優秀論文賞を受けられたのであります。爾来、山村君は労働衛生及び騒音公害に関する権威として広く認められています。

昭和53年には札幌医科大学公衆衛生学教室に助教として迎えられ、そこで魚の水を得たように一層研究に打ち込まれたのですが、さらに教育にも熱意を示されて、学生や研究生の間で信望が厚かったときいております。

本学に来られてからは好きなタバコもぶつとりとやめられた由で、これからの研究と教育に対する山村君の意気込みの程が感じられるようです。本学も創設以来10年を経ていよいよ発展が期待される時期に、山村君を衛生学教授として迎えることができたことは大変心強い限りです。山村君の御研究がこの旭川で一層発展されることを心から望んでおります。

(生化学第二講座 教授)



卒業生の動向

第5回卒業生99名は、第75回医師国家試験で、96名が合格、(昭和58年5月14日付け厚生省の発表) 合格率95.0%で全国国公立大学では13位の成績であった。

卒業生の動向は次のとおり。

開学10周年を祝う

本学は昭和48年9月29日に設置されて以来、今年で10年目を迎えるにあたり、6月15日(木)開学10周年記念行事が行われた。学内においては10時30分から記念植樹が行われ、イチイ・エゾヤマザクラ・アカエゾマツ等100本以上の木々が大学構内に植えられた。13時からは旭川市民文化会館において公開講演会が行われ、聖路加看護大



学長 日野原重明氏による「心と身体の健康づくりの習慣化」、本学産婦人科学教授 清水哲也氏による「体外受精の現況と問題点」の講演で一般市民等約1,200人の聴講を得た。つづいて16時から市内ニュー北海ホテルにおいて式典並びに祝賀会が行われ、約200人の参列者によって、開学10周年を祝った。

又、6月17日(金)には学友会・医大祭実行委員・開学10周年行事実行委員会主催による開学10周年記念ビールパーティーが16時30分から講義棟2階テラスで行われた。

学生・教職員による綱引き大会が行われ、肌寒い天候であったが、約350名の出席を得、開学10周年記念行事が終了した。

(学生課)



第9回医大祭

第9回医大祭は「交感神経興奮せよ!」をテーマに6月16日(休)雨の中の仮装行列で幕が開いた。一般公開日には天候も回復し、6月18日(土)には「ヒップアップコンサート」・「藤原新也」講演会、6月19日(日)にはウルトラクイズ・びっくり旭医新記録等多彩な催しがあり、一般市民約5000人が訪れた。又、医学展・模擬店も賑わいを見せ、盛況のうちに幕を閉じた。

(学生課)



第9回医大祭を振り返って

(第5学年) 大山 昌宏

第9回医大祭は、「交感神経興奮せよ!」をテーマに6月16～19日におこなわれました。あいにく天候に恵まれず、今年は再び常磐公園でおこなう予定だった前夜祭と50チーム以上が参加予定していたソフトボール大会を中止しなくてはなりませんでした。他の企画は無事に終えることができました。

医大祭実行委員会では、学生の多くの意見、希望を取り入れ、一つでも新しいことに挑戦することを目標に企画を立てました。その報告をしたいと思います。

昨年中止した仮装行列も今年は復活し、雨の中各学年の有志が参加してくれました。特に今年はクラブにも呼びかけたところ、野球部が積極的に参加してくれ、みごと優勝しました。ここ数年規模が小さくなった仮装行列ですが、今後より多くの参加を期待したいと思います。

今年の新しい企画の一つとして全学年参加の医学展がありました。今回は「脳死」をテーマとして1年生から5年生の有志が集まり、ディスカッションを重ね研究発表しました。当日は、「脳死を考える」と題して2人の講師をおむかえて講演会を行い、たいへん盛況でした。このように一つのテーマのもとに学年の壁を越えて討論する機会が得られたことは意義あることで、今後も続くことを期待します。

今年は、開学10周年ということで学祭でも2つの催しがありました。一つは開学10周年記念パーティーで、学

生、教官、職員が楽しい一時を過ごしました。特に綱引きは好評で熱の入った試合が続きました。今年だけでなく、このような学生、教官、職員の友好の輪が広がるような企画を続けていきたいと考えています。もう一つは開学10周年記念ウルトラクイズで、約500名の学生、市民が参加して優勝をめざしてクイズに挑戦していました。残念ながら優勝は市内の高校生に奪われましたが、多くの学生、市民の方が楽しんでくれました。

また今年は、昨年に引き続き体育館でコンサートを開催しました。やや大規模すぎたという昨年の反省のもとに今回はヒップアップを呼んで余裕のあるコンサートにしました。約600人の観衆が集まり、ヒップアップもたいへんはりきって楽しいショーを見せてくれました。タレントを呼ぶにあたっては、いろんな問題、学生の意見希望があり全ての要素を念んだ満足のいく企画にするのは難しいこともあらためて感じさせられ、今後の課題として考えなければならぬでしょう。

昨年なかった作家による講演会は、今年初めて当日企画として藤原新也氏をむかえて本学講義室でおこないました。藤原さんはまだ知名度が少ないにもかかわらず、熱心なファン約100名が集まり3時間近くにおよぶ講演をじっと聞いていました。



クラブ、有志参加の企画も今年はより充実したものとなったと思います。たとえば昨年からは始まった弦楽コンサートなどは多くのファンを得たように思いますし、子供から大人まで沸かせたプロレシヨーンや、今年初めての将棋部による人間将棋など楽しい企画がありました。このように、他のクラブ、有志もマンネリにならず新しいものに挑戦してもらいたいと思います。

今後も、今回のテーマ「交感神経興奮せよ！」に示されるように、日常生活ではなし得ないような事に積極的に参加し創造的エネルギーを発揮してよりよい医大祭にしていきたいと思います。来年は記念すべき第10回になります。今年も含め過去の経験を生かし、さらにすばらしい医大祭を創りましょう。

(第9回 医大祭実行委員会委員長)

地区体

男子総合3位に輝く!

第30回北海道地区大学体育大会は、室蘭工業大学が当番校となり7月8日から11日までの4日間、全道42大学から4,000余名が参加、各会場で熱戦をくりひろげた。

本学からは15種目に160名が参加、準硬式野球・サッカーが準優勝、陸上競技 3位(5年山本800m 1位:大会新)、弓道男子 5位・女子(オープン) 4位、バスケット男子・バレーボール・バドミントン男子がベスト8進出等、各種目に善戦健闘し総合成績は男子3位(過去最高)女子17位と好成績を残した。

(学生課)



第30回北海道地区大学体育大会成績一覧

種目	順位				
	優勝	準優勝	3位	旭医大	
陸上競技	男	函教大	道工大	旭医大 3位	
	女	道女短	旭教大	函教大 10位	
準硬式野球	道都短	旭医大	東工大 北学園	準優勝	
軟式庭球	道工大	帯畜大	北学園 札教大	1回戦敗退	
バスケットボール	男	道都大	室工大	道工大 帯畜大	準々決勝敗退
	女	道女短	帯畜大	北星短 札教大	1回戦敗退
バレーボール	道都大	旭教大	札商大 道工大	準々決勝敗退	
サッカー	道工大	旭医大	樽商大 札医大	準優勝	
バドミントン	男	札教大	道工大	札商大	準々決勝敗退
	女	道女短	札教大	旭教大	棄権

剣道	男	北大	酪農大	旭川大 室工大	予選リーグ敗退
	女	道女短	苫駒短	北星大 北大	〃
弓道 (女子はオープン)	男	北大	札商大	北星大	5位
	女	帯畜大	北大	室工大	4位
ハンドボール		北大	旭教大	室工大	予選リーグ敗退
総合	男	道都大	道工大	旭医大 北星大 北学園	3位
	女	道女短	札教大	帯畜大	17位

第26回 東日本医科学生総合体育大会 (夏季大会)

第26回東日本医科学生総合体育大会(夏季)は、帝京大学が主管校となり7月20日～8月7日までの19日間にわたって行われた。

本学からは、19種目に333名が参加。今大会は、陸上競技が6年小黒・岡本、5年山本、4年三宅、2年野津君等の活躍により総合優勝、バレーボール・女子バスケットボール3位、個人戦は卓球(W)に3年大沢・高橋組が準優勝、空手道3年鎌田が4位、弓道女子4年中村が優勝と全種目に善戦健闘、総合成優は35大学中12位であった。(学生課)

第26回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)成績一覧

種目	順位		優勝	準優勝	3位	旭医大
	優勝	準優勝				
陸上競技	旭川	新潟	千葉	優	勝	
準硬式野球	福島	慈恵	山形	2回戦敗退		
硬式庭球	男	千葉	自治	順天	〃	
	女	女医B	北大	福島	1回戦敗退	
軟式庭球		自治	東大	筑波	予選リーグ敗退	
卓球	男	東北	千葉	自治	決勝トーナメント 準々決勝敗退	
	女	千葉	福島	独協	予選リーグ敗退	
バレーボール		群馬	信州	旭川	3位	
バドミントン	男	東北	新潟	自治 福島	1回戦敗退	
	女	女医	札医	東大	〃	
サッカー		東北	福島	東邦	〃	

バスケットボール	男	自治	日大	山形	3回戦敗退
	女	順天	筑波	旭川	3位
柔道		慈恵	群馬	山形 マ	予選リーグ敗退
剣道		新潟	埼玉	慈恵 独協	決勝トーナメント 1回戦敗退
弓道		昭和	新潟	岩手	8位
空手道		札医	埼玉	日大	準々決勝敗退
水泳	男	日大	福島	慶応	
	女	女医	筑波	福島	
総合		福島	東北	千葉	12位



トレーニング機器講習会

6月21日(火)～6月23日(木)までの3日間、本学トレーニングコーナーにおいて、トレーニング機器講習会が実施された。講師は旭川市総合体育館指導主任 山本悠二氏で、第1日・第3日目は8時40分～12時10分まで1・2年生を対象とし、第2日目には一般学生を対象として募集したところ、体育系クラブ代表者等20数名が集まり、13時00分～14時40分まで、各スポーツに応じたトレーニング方法やトレーニング機器の取り扱い方及び基礎体力づくりに関する技術指導をうけ盛況のうちに講習会が終了した。(学生課)



学生教育研究災害傷害 保険の改善について

本保険は発足以来満7年を経過し、この間昭和53年および55年に保険給付内容の改善が行われましたが、更に本年4月1日より課外活動中の事故に対する補償を重点とした保険給付内容の改善が行われました。

改善後の担保範囲等(③及び④)の学校施設外の課外活動は新設)は下記のとおりです。本保険加入者で不幸にも該当する事故に遭った場合は、速やかに学生課厚生係に届け出て下さい。

- ①正課中……………講義、実験など授業を受けている間。(教員の指示に基づく授業の準備等及び大学の図書館、資料室等において研究活動を行っている間を含む。)
- ②学校行事中……………大学の主催する入学式、オリエンテーションなど教育活動の一環としての各種学校行事に参加している間。
- ③学校施設内の休憩中……………大学が教育活動のために所有、使用または管理している学校施設内にいる間。
- ④課外活動中……………大学の規則に則った所定の手続により大学の認めた学内学生団体の管理下で行う文化活動または体育活動を行っている間。(団体としての活動であれば懇親会、ハイキング等も含まれる。)ただし、学校施設外の活動は、大学に届け出た活動になるので、「行動計画書」の提出を励行して下さい。

(注意事項)

- (1)学校施設内であっても、寄宿舎にいる間、大学が禁じた時間もしくは場所にいる間、または大学が禁じた行為を行っている間を除きます。
- (2)学校施設外の課外活動で次のものは除きます。
山岳登山、リュージュ、ボブスレー、航空機操縦(自家用航空機搭乗を含む。)、グライダー操縦、スカイダイビング、スキューバダイビング、外洋におけるヨット操縦、パラセール搭乗、ハンググライダー搭乗、その他これらに類する危険な運動。(学生課)

保険金の種類	正課中・ 学校行事中	課外活動中・ 学校施設内休憩中
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺障害保険金	障害の程度により 54万円～1,800万円	障害の程度により 27万円～900万円
医療 保 険 金	治療日数 4日～6日	6,000円
	◇ 7～13	15,000
	◇ 14～29	30,000
	◇ 30～59	50,000
	◇ 60～89	80,000
	◇ 90～119	110,000
	◇ 120～149	140,000
	◇ 150～179	170,000
	◇ 180～269	200,000
◇ 270～	300,000	
入院加算金(180日を限度)1日につき4,000円		

研究室紹介

■ 脳神経外科学講座 ■

田中 達也

脳神経外科学講座は、米増祐吉教授の就任により昭和53年4月に新設講座として発足した。スタッフには、九州大学及び北海道大学よりユニークな精鋭が集まり、現在では当大学卒業入局者も合わせて総数20名と大世帯になってきた。〈診療〉は、米増教授の信念である「患者のための医療」と「地域に密接した医療の充実」が実践されている。旭川、道北及び道東は、脳腫瘍・脳血管障害の症例が多く、年々紹介患者も増加してきており、地域に根ざした高度の医療を目ざして教室員一同日夜努力している。

〈教育〉は、学生に対しては、広く浅い知識の追求のみに流されがちな現代の流行にさからって、「何故そうなのか」「その考えの根拠は何か」という様に、大脳前頭葉及び辺縁系を十二分に刺激させる教育法が、米増教授指導のもとに徹底している。卒後教育に関しては、当科では専門医の養成が目的となる。卒後の3年間で、基礎的臨床研修、九州大学神経内科研修、麻酔科研修が終ると次いで、博士号取得のための2年間の研究期間かもうけられる。卒後6年目の日本脳神経外科認定医試験に合格して、卒後研修カリキュラムを終える。

〈研究〉は、神経生理学、神経病理学及び脳循環、代謝の3グループに分かれている。新設後間もない状況ではあるが、それぞれの成果は国内及び国際学会に頻回に発表しており、著書や、国内及び国際ジャーナル投稿数も飛躍的に増加してきている。今年のフランスでの国際シンポジウムで、当大学卒業生が、不得意な英会話を駆使し、デスカッションを何とか乗切ったのは、今だ記憶に生々しい。現在3名が、外国に留学しており彼等のホットな研究成果は、帰国後の研究に新しい見吹を与えてくれるだろう。

その他、医局内の雰囲気については、運動神経0の者でも皆スポーツを得意としている。年に一度のスキー合宿テニス大会、朝野球、卓球、バレーと枚挙にいとまがない。雪が降ると、ブロック建設室内大会も重要な行事となっている。

この様に、脳神経外科学講座ではスポーツでの体力作りと教室員の和を弾みに日夜医学の研鑽に励んでいる。

(脳神経外科学講座 講師)



課外活動短信

卓球

- 1/4 道医体
- 1/2 団体戦 優勝
- 個人戦 S 高橋 (3年) 優勝
- W 大沢・高橋 (3年) 優勝
- 田代・佐々木 (6年) 3位

ゴルフ部

- 1/2 道大学対抗B 優勝
- 1/2 第9回全道学生ゴルフ
- 武田 聡 (3年) 参加23選手中 2位

ロック研究会

- 1/2 ロック研コンサート(市民文化会館小ホール)

ギター部

- 1/2 ギター部定期演奏会(市民文化会館小ホール)

陸上競技部

- 1/4 国体北海道予選 山本長史(5年)1500m 1位(3'52"8)
- 1/2 北海道選手権(札幌円山陸上競技場)
- 1/2 山本長史(5年)1500m 1位(3'55"1)



—Pere-Lachaise 巡礼(1983年日記抄)—

6月12日(日)晴 Genèveでの40日の在外研究を終えて、朝 Seydoux 博士に空港まで送って貰い、Paris に向う。約45分の短い飛行だが Paris は本当に都会らしい街だ。街並と生活との調和を感じる。人々の賑わいには親しみがある。「ここに Claude Bernard は休んでいる。すでに彼の名前も墓石の上から消え始め、通行人からは気付かれもしない。しかし彼の肉体が冷たい墓の下で忘却され永遠に失われるとしても、彼の追憶は光栄と光明のなかでいつまでも生き続けるであろう」 フォールの Bernard 伝の一節である。Père-Lachaise 墓園がその場所である。Paris 訪門の目的の一つは、前回 Paris を訪れたとき果せなかった Bernard の墓をたずねることだった。早速 Quartier Latin のホテルを後に、徒歩で約1時間半後 Père-Lachaise に辿り着いた。予想していたより広大な墓所で、入口で貰った案内図にはシヨパン、モリエール、コント、バルザックなどの名前と墓のある区域が記されているが Bernard の名は見当らなかった。2、3人の守衛に聞いたが Bernard を知るものはいなかった。幾千もある墓石のなかから Bernard のものを見つけることは不可能だった。フランスで初めての国葬の栄に浴した現代生理学・医学の生駆者 Bernard は一般の人からは忘れられていることを知っただけで、今日は空しく地下鉄を乗り継いでホテルに戻った。

6月13日(月)晴 Collège de France の研究室に Portet 部長を訪れる。研究室を案内して貰い、今週のセミナー、討論の予定を決める。研究室のスタッフは誰も Bernard の墓を訪ねたことがないという。旧知の Senault 博士が管理事務所に電話で問い合わせ、明日 Bernard

の墓の所在を調べて守衛がその場所まで案内してくれるように手配をしてくれた。夕方、Senault 博士に医学アカデミーに連れて行って貰い、Lehrmitte の画いた実験供覧中の Bernard 像の絵を観る。この絵は転々と移され、しばらく行方が知れなかったがようやく医学アカデミーに到着いたらしい。夏時間のため、いつまでも明るいので、夜近くの Luxemburg 公園のなかを久し振りに走る。

6月15日(水)晴 昨日 Collège de France の古文書資料室で見せて貰い、お願いしてあった Bernard の草稿の体温生理の一部のコピーが届いた。午後再び Père-Lachaise に行く。管理事務所の職員が古い帳簿をめくり、ようやく住所を見付け出した。付添の守衛と自動車でのその区域(20区)に向う。いよいよの思いであったが、守衛と一緒にそのあたりを探しても Bernard の墓に出会うことができなかった。閉園の時間が迫ったので、また空しく引き揚げざるを得なかった。

6月17日(金)晴 昨日は、研究室でのセミナーを終了、パーティの席でわざわざ私のために注文して作ってくれた Bernard の素晴らしいメダルと Portet 部長所蔵 Bernard のパンセ集を贈られる。今日パリ最後の日、朝からの地下鉄ストライキも午後はほぼ正常になったようなので再々度 Père-Lachaise を訪れることにした。これが最後のチャンスかと思うと、少しばかり悲壮な気分だ。事務所の職員に日本からこのためにやって来たことと話し込んだ結果、守衛長らしき人物が、非常に大きな地図で詳しく検討してくれ、彼と再び20区に向う。途中「貴方は非常に熱心にこの墓を探しているが、Bernard というのは貴方の家族だったのか」などという名誉ある質問を受ける。彼は一つ一つの墓石を慎重に数えて、遂に私のために Bernard の墓を探してくれた。思わず彼の手を握りしめ、いま暫くここに留まりたいからと先に帰って貰った。Bernard の墓石に手を置き、その下に休む Bernard に思いを馳せていると、旅の疲れも、外国にいることも忘れてしまうようだった。私淑して久しい Bernard を、これほど身近に感じたことはなかった。本陰を渡れる日差の墓石の上でのさざめきは、今は聞く術のない Bernard の呼び掛けのように思えた一さあ君去り給え、君の道は果しなく続く、疑念を発し、固定した観念を避け、そしていつも精神の自由を保持することを忘れないように—

Garder la liberte fondee sur le doute philosophique

— Claude Bernard —

(生理学第一講座 教授)